

# 親孝行の第一歩

親孝行——そう聞くと、何となく“照れくさい”と感じる人も多いことでしょう。でも、少しだけ勇気を出して、親孝行の一歩を踏み出してみると、きっと何らかの気づきがあるはずです。





# 親孝行強化月間？

この春、社員三十名ほどの精密機械メーカーに就職した太田健おおたけんいちさん（22歳）は、現在、製品管理課で働いています。きょうは、健一さんにとって最初の給料日です。

一日の仕事も終わり、帰り仕度じたくをしていると、野田課長（43歳）から声がかかりました。

「太田くん、もう知っていると思うけれど、来月は〃親孝行強化月間〃だから、今回の給料には五千円の親孝行手当てあてが加算されているからね」

「あつ、はい。そういえば新入社員研修

のとき、総務課長から話がありました。

あのー、その親孝行手当は、皆さんどのように使われているのでしょうか」

「そうだなあ、両親を誘って食事に行くとか、何かプレゼントをする人が多いんじゃないかな。親を亡なくしている人は、お花や線香せんこう代にあてているようだね」

「そうなんですか……。親孝行って、なんだか照れくさいですね。それに、親孝行きょうこうこうを強要きやうようされているようで、ちよつと妙みょうな感じがします」

「たしかに最初はそう思うかもしれないな。私もそうだったから、よく分かる



よ。でも、やってみると意外にいいものだよ。ちよつと勇気がいるけれどね」

「はあ……」

「気乗りしない返事だなあ」

「うちの親に親孝行なんていつたら、笑われそうで……」

「そうか。でも親なら、内心、うれしいと思うがね。若い人たちだって、心の中では、みんな親を大事にしたいって思っているんじゃないかな。私も、この制度が背中をポンと押してくれるから、とても助かっているんだ」

「そうですか」

「同僚で、この親孝行強化月間のときに、必ず、亡くなった父親が好きだった酒を買ってお墓参りに行くという人がいる。この制度のおかげで、親のありがた

さに気づいたと言っていたよ。

ところで、五千円をどう使ったかということと、親孝行を試みた感想文を四百字以内で書いて、私まで提出してほしい。来月いっぱいまでだよ」

「あつ、そうでした。それがあつたんで

すね」

「そういうこと。とにかく、一度やってみるといいよ」

健一さんは、親孝行手当をどうやって使うかを決めかねたまま、家路につきま

# 親孝行のできる社員を育てる会社

社会人として初めての給料——。中には、その一部を感謝の気持ちとして親に贈る人もいます。何かプレゼントをする人もいます。それらも親孝行のひとつです。しかし、そのときの気持

持ちは持ち続けることは、なかなか難しい

いものです。

今日、会社の中には、社員教育の一環として「親孝行のできる社員を育てよう」というところもあります。会社が、お客

さまに質のよい満足を得てもらうには、社員一人ひとりがよりよい人間性を備え

る必要があります。そのために親孝行が推奨すいしょうされているのです。

実際に、会社全体で親孝行に取り組んでいるところの社員は、次のような感想を述べています。

「親は遠慮えんりょがちにプレゼントを受け取っていましたが、内心ではすごく喜んでいることが分かりました。親の気持ちが変わってきた、うれしくなりました」

「きょうだいから『親の誕生日でもないのに?』と聞かれたので、親孝行強化月間の話をしたところ、結局、きょうだいみんなですることになりました。やはり、きょうだいの仲がいいことは、親はうれしいようです」

花一輪いちりん、ハンカチ一枚でも両親にプレゼントすることをとおして、親に対する

感謝の気持ちや、それを実際に行動に移す心を持った人は、多くの場合、お客さまや仕入先しりいれさきの要望などに温かく対応することができ素養そようを持った人です。

企業間の競争はますます激しさを増し、給与面でも余裕よゆうのない企業が多いこととでしょう。

とはいえ、親孝行の動機づけとして手当を支給することが、社員の人間性の向上に役立ち、結果的に会社の業績ぎょうせきにとってもプラスになるという点を考えれば、企業にとつては、あらためて親孝行の価値についての認識を持つ意味があるのではないでしょうか。





# 親孝行には勇気がいる

健一さんは両親との三人暮らしです。



「ただいま」

「おかえりなさい！」

居間から両親の声が聞こえました。

健一さんはいったん自分の部屋で着替えると居間に行きました。

三人で夕食を終えたあと、健一さんは、しばらく父親の洋平さん(50歳)と母親の節子さん(48歳)の会話を聞いていました。その合い間を見計らい、勇気をふりしぼって言いました。

「あのさあ、今度、三人で食事に行かないか？ 食事代は僕が出すから」

「あら、ご馳走してくれるの！ 健一か

ら食事に誘<sup>さそ</sup>われるなんて、たぶん初めてよ。ねえ、お父さん」

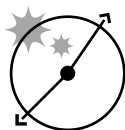
「そうだな。健一、社会人になったからって、無理をしてサービスしなくてもいいよ。私たちはうれしいけれど、あとが続かないぞ」

「いや、実は会社で親孝行強化月間というのがある……」

健一さんは、会社から親孝行手当が支給されたことや、その報告のために感想文を書いて提出しなければならないことなどを説明しました。

結局、洋平さんも節子さんも、健一さんの申し出を受けて、翌月の最初の日曜日に、近くのレストランで食事をするこ  
とになりました。

## 親孝行の はずが……



約束の日曜日のことです。

洋平さんも節子さんも、夕方が近づくにつれてそわそわとし始め、約束の時間の二十分前には準備もすっかりできていました。

ところが、出発の時間になっても、健一さんは帰ってきません。朝から友人の家にかけたままなのです。

しばらく待っていた洋平さんでしたが、あまりかねて健一さんの携<sup>けい</sup>帯電話に連絡

しました。

「健一、まだ帰ってこないのか。もう約束の時間は過ぎてるぞ」

「しまった！」

健一さんは、両親との約束をすっかり忘れ、友人の家で話やゲームに夢中になつていたのでした。あわてて友人の家を飛び出した健一さんは、

「ああ、なんて言いわけをしよう。親孝行なんて言わなきゃよかったかな。怒っているだろうなあ……」

と考えながらバイクを走らせました。

自宅に到着すると、両親は玄関先で待つていました。

「健一、約束したの忘れてたのか！」

洋平さんが強い口調で言いました。健一さんは、ありのままを話そうと覚悟を



決めました。

「ごめん。友だちのところに行つていて、うっかり約束を忘れていたんだ……」

その言葉に、洋平さんも節子さんも、あつげにとられて言葉が出ません。

「これでは親孝行どころじゃなしな」

「ごめんなさい。食事は……やめる？」





「健一の忘れっぽいところは、私に似たのかしらね。今日のところは健一の顔を立って、とりあえず食べに行きましようよ、お父さん」

そんな節子さんの言葉で、すっかりしよげていた健一さんは救われました。

## 「体には

## 気をつけて」



レストランに入ると、店員から喫煙の有無を尋ねられました。健一さんは、いつもの調子で喫煙席を希望しました。

“二人ともタバコを吸わないから、禁煙席のほうがよかったかな”

一瞬、その頭をよぎったものの、案内されるままテーブルに着きました。

すると近くのテーブルで、近所の山田さんが食事をしていました。それに気づいた節子さんは、山田さんの奥さん



に向かつて言いました。

「きょうは、健一が私たちにご馳走してくれるんですつて。会社から親孝行なんとかつていうのが出てね……」

「母さん、余計なこと言うんじゃないよ！」

「はい、はい……」

節子さんは、少し悲しそうな表情を見せました。

健一さんは、メニューから両親の喜びそうな料理を選び、ビールも注文しました。そして、会社のできごとを話したりして、できるだけ両親にサービスをしました。

「会社の制度だけど、こうして健一と、ゆつくり話ができるなんてうれしいわ。久しぶりだもの。ねえ、お父さん」

「ほんとうだな。健一もずいぶん頼もしくなったものだと思うよ」

健一さんは、満腹感も手伝い、ポケットから取り出したタバコに火をつけました。すると、節子さんの表情が変わりました。

「健一、いつもしつこく言うけれど、あなたは小さいとき、体が弱かったんだから、タバコはやめたほうがいいわよ。お父さんもやめたんだからね」

「えっ、そうなの？ 父さん、タバコを吸ってたの？ 知らなかったよ」

「もう昔のことだ。健一が歩き始めたころまで吸っていたかなあ。あのころお前はいろいろと病気をしたからな……」

「お父さんは、健一の体によくないからといって、やめたのよ」

「そうだったんだ。知らなかった……」  
健一さんは、思わずタバコの火を消しました。

「さあ、帰ろうか。きょうは健一のおかげで、久しぶりにおなかいっぱい食べてしまったよ」

健一さんが代金を支払い、三人はレストランをあとにしました。





# 親の思いに少しだけ気づく

その日の夜、健一さんは、会社に出す感想文を書こうと机つくえに向かいました。そして、これまでのことを、思い出すままに振り返ってみました。

○食事に誘ったときの親のうれしそうな顔——。

○でも、親との約束を忘れてしまった自分。そのときの父親の厳きびしさ。その場を救ってくれた母親の明るい言葉——。

○近所の山田さんに自慢じまんしていたときの母親のうれしそうな顔。それをきつくいさめたときの悲しそうな顔——。

○ビールを飲み干ほしながら、僕のことを「頼もしい」と言ってくれた父親——。

○タバコを吸ったときの母親の心配そう  
な、そしてかわいい顔——。

○僕のためにタバコをやめたという父親のこと。初めて知った。それなのに、自分  
は喫煙席を選んでしまった——。

思い出していると、昔のこといろいろ  
ろと浮かんできました。

子どものころに木から落ちてけがをした  
ときのことや、交通事故にあったとき  
のこと。病気で寝込んだときに親がつ



きつきりで看病かんびょうしてくれたこと。聞くところでは、難産なんざんのために母体ぼたいが危ない中でも、自分を産うんでくれたということ。〃これまでずいぶんと心配をかけてきたな。親おやってというのは、本気で僕のことを考えてくれていたんだなあ……。

タバコはすぐにはやめられないだろうけれど、せめて親おやに自分の健康けんこうのことは心配しんぱいをかけないようにしよう……。

健一けんいちさんは、そんな思いおもいを感想文かんさうぶんに書かきました。

# 親孝行の第一歩

私たちは親孝行というと、プレゼントを贈ったり、食事や旅行に連れて行くことなどを思いつきます。もちろんこうしたことも、親に感謝の気持ちを表すという意味では尊いものです。

しかし、必要以上に高価なものをプレゼントしたり、散財するのは、かえって親に心配させることにもなりかねません。親はいつも、わが子のことを気にかけています。そして、なによりも健康について心配をしているものです。

中国の古典（『孝経』）に、次のような言葉があります。

「身体髮膚、これを父母に受く。敢えて毀傷せざるは、孝の始めなり」

私たちの体は、毛髪・皮膚にいたるまで、すべて親からいただいたものであって、それを痛めたり、傷つけたりしないように大切に守っていくことが、親孝行の始まりであるという意味です。

私たちは、自分の体はもちろん、内面の心も、父母、さらに祖父母・祖先の存在があつてこの世に生まれてきたものです。そして生まれてから今日まで、親の深い愛情のなかで、はぐくまれてきました。ですから親にすれば、わが子は、どん

# 孝は百行のもと

なに成長しても、わが子です。社会的に高い地位を得て、経済的に豊かになっても、つねに親はわが子のこと、中でも体のことを心配し、気づかう存在なのです。

その意味で、私たちはまず自分の健康に気をつけて、親に安心してもらうことが大切なのです。それが親孝行の第一歩であるといえましょう。

昔から、「孝は百行のもと」といわれるように、親に対する「感謝の心」や「報恩の心」をはぐくむことは、よりよい人間関係を築く基本になります。

もとですから、親孝行は、まさに道徳実行の出発点であるといえるでしょう。

親孝行の心は、単に自分の親だけではなく、きょうだいや家族、さらには職場の人たちやお客さま、お得意さまなど、自分の周囲の人たちの立場になって考えることのできる「思いやりの心」を育てることにつながります。

思いやりの心は、すべての人間関係の

